

特定部会打ち合わせ会の報告

平成17年3月17日、9時30分より11時30分まで、北海道大学ファカルティハウス「エンレイソウ」第1会議室において釧路、根室付近の地殻活動について、北海道を中心とする関係機関による打ち合わせ会を行ったので報告する。

【出席者】

大竹会長、岡田部会長、谷岡委員、長谷川委員（代理：三浦）、伊藤委員（代理：橋本）、金田委員、笠原元委員、海津委員、村上委員

【オブザーバー】

北海道大学、北海道開発局、北海道、道立地質研究所、気象庁、札幌管区气象台、仙台管区气象台、国土地理院、北海道地方測量部

【議論の概要】

1. 根室・釧路という領域で限って見た場合

- ①地震活動としては2003年の十勝沖地震の後、活動が高まって、その後減衰していった中で、今年の2月頃から増えているように見える。
- ②地殻変動、GPSで見ると、2003年9月以降余効変動が続く中で、2004年の中ごろから、地震活動には対応しないが、別なステージの地殻変動、ゆっくりすべりが加わっているように見える。
- ③相似地震でみると、GPSで見た動きとは別に、2004年11月の釧路沖の地震以後、非常に加速したすべりが何か加わっているように見える。

2. 広域で見た場合将来の活動に結びつけて考えるべきこと

- ①1973年の根室沖のアスペリティと2003年の十勝沖のアスペリティの中間領域が、地震活動の空白域として見える。
- ②海溝軸近くにも注視すべき領域がみられる。
- ③ただし、1973年と2003年の地震の中間領域は一昨年（2004年）の十勝沖地震の余効すべりが大きい。

3. 活動の監視について

- ①気象庁は管区气象台ですでに常時監視体制にあるので、異常なことがあれば関係機関に情報を出してゆく。
- ②東北大と北海道大では、相似地震のセミリアルタイム処理をはじめたので、4日程度で変化をとらえられる体制となっている。
- ③北海道大学ではFM電波の観測、傾斜計、地電流、全磁力などの観測を根室、厚岸、弟子屈において行うことを検討したい。また、歪計の観測が初期的に地震の規模の推定に有効なので、これについても検討する。
- ④海洋研究開発機構の海底津波計は分岐が可能な構造であり、増設可能になっているが、増設については優先順位等考慮すべきことがある。
- ⑤国土地理院では当該地域のGPSデータを、閉庁日でも監視できるようにした。